



歩んできた自力教、他力教という結果の形、型に捉われ、浄土の救済教は凡夫が阿弥陀如来に救われていく道、聖道の自覚教は自らの能力によって証りを開いていく道として二分化してしまう傾向にあるといえる。

ところが仏性の問題は、そのような自覚教、救済教という枠にはかかわらず、仏教が仏道として成り立つところの基本、根本にかかわる事柄であるといえる。つまり、仏性が衆生の上にとどるに成り立つかが、私たち衆生の自力回向を基とするか、如来回向を基とするかによって、そのあり方は異なると了解できる。

曾我量深師は『救済と自証』<sup>③</sup>の中で、

救済の真実道について、救済の教へと而うして自覚の教へとというものは稍もすると矛盾撞着するように考えられて居ますが、法蔵菩薩の本願というものの上におきましては、自覚の教へとというものと而うして救済の教というものは全く一致してくる。(中略)然るに第十八願に目覚める時になりますと、そこには自覚の教へ、つまり救済の道が徹底して自覚といふところへ進んできた、所謂自覚というものが救済といふものを抱込んで居るものが第十八願である。

と、「如来の救済の根源には、法蔵菩薩の本願の自証が

ある」ことを要点として説かれる。

③ 親鸞の浄土真宗は救済教にとどまる教えではなく、「救済の自証」、救済の自覚の教えである。『教行信証』総序には、

敬信真宗教行証特知如来恩徳深

と表白している。教・行・証は聖道、浄土の形にかかわらず仏教の具備している実践概念である。教えがあるということは行、教えに生きる生活があり、証りに到る道があるということである。ここでの教えとは『大無量寿経』であり、行とは本願の名号であり、証とは無上涅槃への道のことである。その教・行・証をわが身の生活の上に敬信することが、念仏の、如来回向の信の目覚めの道である。親鸞は『大無量寿経』の歴史に立ち、本願史観、本願の「救済の自覚」に遇い得た恩徳を、先の文は語っているといえる。長く仏道は積尊を理想とする聖道、自力の教・行・証の道として考えられてきた。親鸞はその仏道を、法然の捨聖帰浄の伝統に立ち、

聖道諸教行証久廢、浄土真宗証道今盛也(二後序)

と表明している。しかし、そこでの浄土真宗の名のりは、「行巻」では「誓願一仏乗」「弘願一仏乗」と言われ、また、『末燈鈔』には、

選択本願は浄土真宗なり。定散二善は方便假門なり。  
 浄土真宗は大乗のなかの至極なり。

とも言われるように本願史観の中に全仏教を包み、全仏道を見直して行く事業であったといえる。

その意味では、親鸞教学における仏性の問題は、自力の自覚教、他力の救済教という二つの形、パターンの中での問題ではないであろう。仏陀の遺教である「一切衆生悉有仏性」、全人類の救いの自証が、私たち衆生の上にとどのように教・行・証として具備するかという、仏道の根本の問題に他ならないと了解できよう。

仏の教えとは「一切衆生悉有仏性」、誰しもが選びなく仏に成る道のことである。そのような問いの中で、親鸞はなぜ仏道は悉有仏性を究極としながらも、なぜか私たちの歴史、地上の生活の上では悉有仏性の道が開かれず、相も変わらず品位階次の修道が続けられているのか。一乗の法(悉有仏性)を究極としながらも、なぜ一乗の法が一乗の機(悉有仏性の機)として実現しないのかという問いがあったといえるだろう。そのことは、浄土教が久しく担ってきたところの五乗齊入、凡夫入報等の課題によって知ることがができる。

法然は『選択集』の劈頭に道綽の『安樂集』の文を引

き、仏道の課題を次のように述べている。

『安樂集』上云。問曰。一切衆生皆有<sub>レ</sub>仏性。遠劫以來<sub>レ</sub>値<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>仏。何因至<sub>レ</sub>今、仍自輪<sub>レ</sub>廻生死<sub>レ</sub>不出<sub>レ</sub>火宅<sub>一</sub>。

仏道の歴史は皆有仏性を教説し、また多仏に値う歴史の中にありながらも、なぜ生死に輪廻し、火宅を出ることのない有様が今日まで久しく連綿と続いてきているのか。そこには仏法の値遇の縁の中にありながらも、仏法を求め、仏法に自身が遇い得なかつた仏道への問い、悲泣が込められているといえる。

そのような問いの中に、法然の仏道観、本願念仏の道は明らかにされてくる。親鸞もその歴史に参じ、よき人法然と値遇し、その課題を担い、「誓願一仏乘」を明らかにしてくる。一仏乘が、「誓願」において再確認されてくる仏教史観である。そのことは「一乗海積」に具体的に示されてくる。

その親鸞の仏道了解は、先に述べたようによき人法然の教示する「選択本願念仏」の道が立脚地となっている。その点については、「行巻」に念仏成仏の道を生きた七高僧の伝統をはじめとし、念仏を讃嘆して生きたところの先師の経論釈が引用されている。そのように七高僧をはじめと

する先達の念仏の伝承に立ち、「行巻」の引文すべてを、  
 「選択集」「総結三選の文」にて結釈する。

夫速欲離<sub>レ</sub>生死<sub>二</sub>種勝法中且闍<sub>レ</sub>聖道門<sub>一</sub>選入<sub>レ</sub>淨土  
 門<sub>一</sub>欲<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>淨土門<sub>一</sub>正雜<sub>二</sub>行中且拋<sub>レ</sub>諸雜行<sub>一</sub>選應<sub>レ</sub>歸<sub>レ</sub>正  
 行<sub>一</sub>欲<sub>レ</sub>修<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>正行<sub>一</sub>正助<sub>二</sub>業中猶傍<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>助業<sub>一</sub>選應<sub>レ</sub>專<sub>レ</sub>  
 正定<sub>二</sub>正定之業者正定即是稱<sub>レ</sub>仏名<sub>一</sub>・稱名<sub>二</sub>・必<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>生<sub>二</sub>  
 依<sub>レ</sub>仏本願<sub>一</sub>・故

続いて、宗祖がいただかれた念仏の歴史の了解が、

明知是非<sub>二</sub>凡聖自力之行<sub>一</sub>故名<sub>レ</sub>不回向之行也、大小聖  
 人・重軽悪人・皆同齊應<sub>レ</sub>歸<sub>レ</sub>選択大宝海<sub>一</sub>念仏成仏<sub>一</sub>  
 と表白されている。

そこには、歴史を超えた一乘法が、一乘法として非歴史的な観念性にとどまるのではなく、また修道において、人間の作為による修道の上下、高低の段階性を残すことなく、「一切衆生悉有仏性」の大乗の生命が、「大小聖人重軽悪人皆同齊應<sub>レ</sub>歸<sub>レ</sub>選択大宝海<sub>一</sub>念仏成仏<sub>一</sub>」と、現実の只中にひらかれてきた一乗の機が明らかにされているといえる。

仏教の歴史は久しく一仏乗の実現を目指しつつも、一仏乗が一仏乗の歴史的現実となることなく、一切皆成の理念性か、あるいは五姓各別の修道性かのいずれかに偏執してきた。その仏道の歩みを、念仏成仏の道は撤回してくるの

である。その点が、「非<sub>二</sub>凡聖自力之行<sub>一</sub>故名<sub>レ</sub>不回向<sub>レ</sub>行<sub>一</sub>」と押えられている。人間からの自力行、人間の努力とか、成果によって左右されない人本来の平等の道は、人間からではなく、選択本願の念仏行、人間の選びではなく如来選択の本願、仏名に呼び覚まされていく道として見開かれてきたのである。

その選択本願の行信、選択本願の体験的自証から、仏教の歴史が問い直されてくるのが一仏乗の開頭、「行巻」の「他力釈」と「一乗海釈」の了解といえるだろう。

他力救済の道は、仏道の自覚、自証の反対概念ではなく、如来回向の行信、「救済の自覚」を顕わす仏道の了解といえる。

## 二

言<sub>二</sub>一乗海<sub>一</sub>者一乗者大乘大乘者仏乗得<sub>二</sub>一乗<sub>一</sub>者得<sub>二</sub>阿耨多羅三藐三菩提<sub>一</sub>阿耨菩薩者即是涅槃界涅槃界者即是究竟法身得<sub>二</sub>究竟法身<sub>一</sub>者則究<sub>二</sub>究竟<sub>一</sub>乘<sub>一</sub>無<sub>二</sub>異如来<sub>一</sub>無<sub>二</sub>異法身<sub>一</sub>如来即法身究<sub>二</sub>究竟<sub>一</sub>乘<sub>一</sub>者即是無辺不斷大乘無<sub>二</sub>有<sub>二</sub>三乘<sub>一</sub>三乘<sub>二</sub>一乘<sub>一</sub>三乘者人<sub>二</sub>於<sub>二</sub>一乘<sub>一</sub>一乘者即第一義乘唯是誓願一仏乗也(「行巻」)

「行巻」「一乗海釈」では、仏陀の説法の始終である

『華嚴經』と『涅槃經』の文が引用されている。『華嚴經』は仏の自内証を背景とした説法であり、『涅槃經』は仏の入涅槃に際しての一切衆生悉有仏性の教説である。その二經が「誓願一仏乗」の内容として了解されている。『大無量壽經』から見れば、一仏乗の「一」は淨土であり、「一仏乗」とは仏願力に乗ずることといえるだろう。

『華嚴經』言文殊法常爾・法王唯一法・一切無碍人・一道出生死一切諸仏身唯一法身・一心一智慧力無畏亦然(前同)

と言われる。「文殊の法」、法の王たるものは一法であることを顕わし、一切の無碍人は「一道より生死を出」でたまえる故に一法身であり、一心、一智慧であると説く。

また『涅槃經』の文では、

善男子畢竟有二種一者莊嚴畢竟二者究竟畢竟一者世間畢竟二者出世畢竟莊嚴畢竟者六波羅蜜究竟畢竟者一切衆生所得二乘一乘者名・為二仏性一以二是義一故我説二一切衆生悉有仏性一一切衆生悉有二乘一以二無明覆一故不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>(前同)

と説くと言われる。畢竟に二種があると。一は莊嚴畢竟であり、二は出世畢竟である。仏の世界、如来の内証においては「一切衆生所得一乗一乗者名二仏性」、「我説一切

衆生悉有一仏性」と示し述べる。しかし、私たち衆生は真実に昏く、衆生の根源の仏性は「以二無明一覆故不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>」という現実を生きていると教える。そういうところに、仏陀の教言を聞き、教えに目覚めよと、問われている私たちの人間存在(無明)があるといえるだろう。

たとえば世親の『仏性論』<sup>④</sup>によれば、仏性を教説しつつ、五過失ということが言われる。

- 一 為<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>衆生、離<sub>二</sub>下劣心<sub>一</sub>
- 二 為<sub>レ</sub>離<sub>二</sub>高慢心<sub>一</sub>
- 三 為<sub>レ</sub>離<sub>二</sub>虚妄執<sub>一</sub>
- 四 為<sub>レ</sub>除<sub>レ</sub>誹<sub>三</sub>謗<sub>二</sub>眞実法<sub>一</sub>
- 五 離<sub>二</sub>我執<sub>一</sub>

そこには人間存在のあり方が、いかに深く我執に覆われ、自我差別の意識に生きるかが表わされている。私たちの物の見方は、「柳は緑、花は紅」という純粹経験、純粹なる事実を純粹な事実と見、知ることのできないところにある。自我分別を中心として、他と自己を比べ、比較して、あるときは高慢心となり、また下劣心となり、深い妄執の中を生き、妄執の心に沈んでいくところの存在といえる。そのあり方は、眞実法を誹謗し、本来の自己、仏性を見失い、我執を自己としたところの人間である。

そのような人間存在が「一切衆生悉有仏性」の教説を聞き、歩むということは、(一)正勤心、(二)恭敬心、(三)般若、(四)闍那、(五)大悲心の五種の心、功德が生起するといわれている。そのことは教えによって自己の存在の根源が知られることにより、自重の心と他への尊敬の念が起こってくる。また智慧により煩惱に動かされることが少なくなり、眞実の法を憶念し、自我否定の力を賜わることによって自他平等の道、大悲に歩む力、五功德が生ずると言われている。

そういうところに「我說一切衆生悉有仏性」という教説と、「煩惱覆故不能得見」という人間存在のあり方を知ることができのではなからうか。もちろんここでいう「悉有仏性」ということは、人間存在の内に金の卵があるということではない。「仏性決定本有、離有離無故」(「仏性論」と言われるように、私たち人間の自我分別が破れ、人間存在の根底に流れている法性、智慧を自証し、目覚めることをいうに他ならない。

さて、それならば、「我說一切衆生悉有仏性」(覺)、  
「煩惱覆故不能得見」(未覺)という、全く極面を異にする関係を親鸞はどのように『教行信証』に了解していたのであろうか。

それは「一乗海釈」で示された『涅槃経』の課題である。

我說一切衆生悉有仏性一切衆生悉有一乗以無明覆故不能得見<sup>b)</sup>

その点を『教行信証』に尋ねれば、(a)の側面は超越的な仏の自内証であり、「真仏土巻」に顕わされる「涅槃仏性」(果位)といえるだろう。そして、(b)の側面は私たちの歴史内部、無明界の歴史である。光明・名号を以て無明を破り、無上涅槃への道を成就してくる本願力回向、「信心仏性」(因位)の目覚め、自証と了解できよう。

『弥陀和讃』には、「平等心をうるときを、一子地となすけたり、一子地は仏性なり。安養にいたりてさとるべし。如來はすなわち涅槃なり、涅槃を仏性となすけたり、凡地にしてはさとられず、安養にいたりて証すべし、信心よることそのひとを、如來とひとしときたもう、大信心は仏性なり、仏性すなわち如來なり」と讃頌されている。

思うに、「真仏土巻」は、本願救済の自覚を顕わす根源である。『教行信証』の「証」の後に「真仏土」が示されている。「証」とは衆生の行信、行証の自証、必至滅度の願の目覚めである。いい換えれば、必至滅度の願の自証は、「衆生往生の因果」である。その「衆生往生の因果」、衆生の行信、行証をうみだす根源が「如來淨土の因果」、即ち「真仏土」と了解することができよう。

「真仏土卷」には、

謹按<sub>三</sub>真仏土<sub>二</sub>者則是不可思議光如来土者亦是無量光明土也、然則酬<sub>コタフ</sub>報<sub>コタフ</sub>大悲誓願<sub>二</sub>故曰<sub>三</sub>真報仏土<sub>一</sub> 既而有<sub>二</sub>願<sub>一</sub>即・光明壽命之願是也

と言われている。光明・寿命の願とは仏の法身の成就のことであるが、その願いを親鸞は仏身・仏土の願と見定めてくるところに大事な点がある。仏身の正覚が仏陀一人にとどまるのではなく、仏の法身、光明・寿命の願はすべての衆生を仏国土へ生まれせしめようと酬報(コタフ)した、衆生に応えたところの誓願のことである。

それ故、「真仏土卷」には「涅槃經」によつて仏の超世の自内証、大涅槃、涅槃仏性の境界が詳細に明らかにされている。大涅槃の世界が常・楽・我・浄の四徳の内容で顕わされている。その如来の内証は、「二十五有名為<sub>三</sub>不浄<sub>一</sub>能永断故得<sub>三</sub>名為<sub>三</sub>浄<sub>一</sub>」と、私たちの歴史を超えた清浄眞実の世界、浄土をいい、私たちの世界は不浄、虚仮不実の煩惱に汚染された穢土という質的な違いを明らかにしている。

そして、その純粹無為の常・楽・浄の涅槃界を心証する「我徳」が、「真仏土卷」では「如来徳」をもつて表現される点に注目される。「我徳」とは「出世我相名為<sub>三</sub>仏性<sub>一</sub>」

如<sub>レ</sub>是計<sub>レ</sub>我是名<sub>三</sub>最善<sub>一</sub>」(涅槃經)、また「今日如来所説真我、名曰<sub>三</sub>仏性<sub>一</sub>」(前同)といわれる。その「出世の我相」、「真我」は世界のあらゆる相対的關係から独立した自在、無碍の境界である。その自在の境界はよく世界から独立するが故に、またこの世、この世界を包む八自在(多少自在、充滿自在、輕拳自在、所作自在、根自在、知法自在、説自在、遍滿自在)の内容としてはたらくといわれる。その「我徳」を「真仏土卷」では「如来徳」の六文に帰している。その中、先の五文は「煩惱不起」、「無碍」、「非<sub>三</sub>凡夫声聞縁覚菩薩<sub>一</sub>」、「遍滿無量阿僧祇土」、「実相」をもつて「出世の我相」、「真我」と同じ内実を語っている。そして、第六文のところでは、先に示した五文を押えて、

如来実不<sub>三</sub>畢竟涅槃<sub>一</sub> 是名<sub>三</sub>菩薩<sub>一</sub>

と言われている。そこには超世なる如来の内証である涅槃、解脱、自在の心証がこの世の煩惱、業繋の衆生のところに衆生を救済する力としてはたらくことがよく示されているといえる。

その超越的な自内証、大涅槃の徳を「真仏土卷」では光明無量、寿命無量の願に包んでいる。

設我得<sub>三</sub>仏<sub>一</sub> 光明有<sub>三</sub>能限量<sub>一</sub> 下至<sub>三</sub>不<sub>三</sub>照<sub>三</sub>百千億那由他諸仏国<sub>一</sub> 者不<sub>三</sub>取<sub>三</sub>正覚<sub>一</sub>

設我得<sub>二</sub>仏<sub>一</sub>壽命有<sub>二</sub>能限量<sub>一</sub>下至<sub>二</sub>百千億那由他劫<sub>一</sub>者  
不<sub>二</sub>取<sub>一</sub>正覺<sub>一</sub>

如來の光明、壽命の二無量をもつて衆生を眞實の仏土、  
國土に酬報成就しようとするのである。

仏の光明は、我は正覺を得た、「我は光明なり」という  
ことではなく、「我、光明無量ならん」、「我、壽命無量な  
らん」と、この世の煩惱、業繫の中に生きる衆生を包み大  
悲誓願する功用、衆生を救済せんとする力用である。

超世無上に撰取し

選択五劫思惟して

光明壽命の誓願を

大悲の本としたまえり（『正像末和讃』）

と讃頌されている。

「超世無上に撰取」する大悲とは、人間からの行為では  
なく、仏の果位の光明、壽命が因位の願心、因位の本願と  
なつて衆生に信心を發起してくる「大悲の本」である。

三

『涅槃經』には「一切衆生悉有<sub>二</sub>仏性<sub>一</sub>」と言われ、『仏性  
論』には「仏性決定本有、離<sub>レ</sub>有離<sub>レ</sub>無故」と言われている。  
「眞仏土卷」には、

謹按<sub>二</sub>眞仏土<sub>一</sub>仏者則是不可思議光如來土者亦是無量光  
明土也、然則酬<sub>二</sub>報大悲誓願<sub>一</sub>故曰<sub>二</sub>眞報仏土<sub>一</sub>既而有<sub>二</sub>  
願<sub>一</sub>即<sub>二</sub>光明壽命之願是也、

と示される。同じように「化身土卷」にも「既而有悲願」  
と述べられている。そして「行卷」、「信卷」、「証卷」では  
「出於大悲願」の展開となっている。そこには「悉有」、  
「本有」の仏性論が本願論の内容として力動的に表現され  
ていると了解できよう。

既而有願（眞仏土卷）∴既而有悲願（化身土卷）

出於大悲願（行卷）

出於念仏往生之願（信卷）

出於必至滅度之願（証卷）

出於一生補処之願（証卷）

眞仏土は「既にして願有<sub>二</sub>す<sub>一</sub>」（第十二・十三願）また化身  
土は「既にして悲願有<sub>二</sub>す<sub>一</sub>」（第十九・二十願）といわれるよ  
うに、仏土については「願有<sub>二</sub>す<sub>一</sub>」と言われる。そして、  
行・信・証は「大悲の願より出でたり」（第十七願）、「念仏  
往生の願より出でたり」（第十八願）、「必至滅度の願より出  
でたり」（第十一願）、「必至補処の願より出でたり」（第二  
十二願）、と「出」によって押えられている。

そのように「教行信証」を尋ねると、「既而有願」（酬

報)、「出於大悲願」(回向)の構造、関係にある。つまり酬報と回向を内容とした本願論を以て、仏性(涅槃仏性・信心仏性)は了解されているといえるだろう。

「既にして願有す」という仏の光明無量、寿命無量の願は衆生を包み、「大悲の願より出でたり」と、私たち衆生の場所、生活のところに自証経験を開くといえる。その自証とは、如来の救済せんとする諸仏称名の願、至心信樂の願の本願の行信、目覚めのことである。

諸仏称名の願とは、「十方恒沙の諸仏如来、みな共に無量寿仏の威神功德不可思議なるを讃嘆したまう」と言われるように、教主世尊の教言に値遇することである。法に目覚めよと、名号法をもつて讃嘆してくださるよき人、諸仏世尊の教えに帰依し、帰命する道のことである。その目覚めた人、諸仏讃嘆の称名は、私たち無明の衆生には、諸有衆生聞其名号信心歡喜乃至一念至心回向願生彼国即得往生住不退転唯除五逆誹謗正法(『大經』)

と言われる聞名にある。「聞其名号信心歡喜乃至一念」に、如来の清淨願心の回向成就、「至心回向したまえり」という、如来の救済せんとする呼びかけ、願心に覺醒し、無上仏道に生きる正定聚の身を得るのである。

名号、み名に呼び覺まされることは『正信偈』には、「重誓名声聞十方」、「本願名号正定業、至心信樂願為因」と讃嘆されている。名声は仏の誓い、仏の魂であり、本願の名号は仏願に乗託して生きる道、正定業を得たということである。

『重誓偈』には、

我建超世願 必至無上道

斯願不満足 誓不成正覺

我於無量劫 不為大施主

普濟諸貧苦 誓不成正覺

我至成仏道 名聲超十方

究竟靡所聞 誓不成正覺(『大經』)

と讃嘆されている。

四十八願全体が「重誓偈」によって押えられている。四十八願が三つの誓いを通して「名聲超十方」と、第十七願に帰結することが示されている。第一は満願果を誓い、第二は大施果を誓い、第三は名聞果を誓っている。「我、超世の願いを建つ」とは四十八願を建て、阿弥陀仏の本願によって衆生を成仏せしめようという誓いである。「我、無量劫において、大施主」になろうとは、涅槃が仏の自利だけでなく、自利利他平等の世界として大涅槃、淨土莊嚴

をもって仏の自利を衆生に回施しようという誓いである。

そして「我、仏道を成るに至りて、名声十方に超えん」とは、名名として無上菩提の因を成就しようという誓いである。その名声は、

為衆開法藏 広施功德宝

常於大衆中 説法師子吼

と、衆生の根底に流れている法、「法藏を開く」はたらきに他ならない。ただ私たちは、その根源の促しを見失って、回施されている法藏を暗い蔵にして無明界に流転漂没しているのである。

それ故、諸仏称名の願（第十七願）のはたらきによる至心信樂の願（第十八願）成就の了解は、「三心一心の問答」では、

天親の、

世尊我一心 帰命尽十方

無碍光如来 願生安樂国

という一心帰命の信仰的自覚の願意が「至心信樂欲生我」の三心によって推求されている。

又問如<sub>三</sub>字訓論主意・以<sub>三三</sub>為<sub>二一</sub>義其理雖<sub>三</sub>可<sub>二</sub>然<sub>一</sub>

為<sub>三</sub>愚惡衆生<sub>一</sub>阿弥陀如来已發<sub>三三</sub>心願<sub>二</sub>云何思念也

と、論主の「一心」の自覚を通して、本願三心の願が尋ね

られている。

仏意難<sub>二</sub>惻<sub>一</sub>然<sub>二</sub>竊推<sub>一</sub>斯心<sub>一</sub>一切群生海・自<sub>二</sub>從無始<sub>一</sub>  
 已来乃至今日至今時<sub>一</sub>穢惡汚染無<sub>二</sub>清淨心<sub>一</sub>虚仮諂偽無<sub>二</sub>  
 眞実心<sub>一</sub>是以如来悲<sub>二</sub>憫<sub>一</sub>一切苦惱衆生海<sub>一</sub>於<sub>二</sub>不可思議  
 兆載永劫<sub>一</sub>行<sub>二</sub>菩薩行<sub>一</sub>時<sub>二</sub>三業所修<sub>一</sub>一念<sub>二</sub>刹那無<sub>二</sub>不清  
 淨<sub>一</sub>無<sub>二</sub>不<sub>二</sub>真<sub>一</sub>心<sub>一</sub>如来以<sub>二</sub>清淨真心<sub>一</sub>成<sub>二</sub>就<sub>一</sub>円融無碍不可  
 思議不可称不可説至德<sub>一</sub>以<sub>二</sub>如来至心<sub>一</sub>回<sub>二</sub>施諸有<sub>一</sub>一切煩  
 惱惡業邪智群生海<sub>一</sub>則是彰<sub>二</sub>利他真心<sub>一</sub>故疑蓋<sub>一</sub>無<sub>二</sub>雜<sub>一</sub>  
 斯至心則是至德尊号為<sub>二</sub>其体<sub>一</sub>也、

そこには、「至心はすなわちこれ至徳の尊号をその体とせるなり」と、如来の至心の願意が推求されている。そして、『大無量寿経』勝行段の教説によって、法藏菩薩の修行の了解が述べられている。

是以『大経』言<sub>二</sub>不生<sub>一</sub>欲覺瞋覺害覺<sub>一</sub>不<sub>二</sub>起<sub>一</sub>欲想瞋想  
 害想<sub>一</sub>不<sub>二</sub>著<sub>一</sub>色声香味之法<sub>一</sub>忍力成就不<sub>二</sub>計<sub>一</sub>衆苦<sub>一</sub>少欲  
 知足無<sub>二</sub>染患癡<sub>一</sub>三昧常寂智慧無碍無<sub>二</sub>有<sub>一</sub>虚偽諂曲之  
 心<sub>一</sub>和顔愛語先<sub>二</sub>意<sub>一</sub>承問勇猛精進志願無<sub>二</sub>倦<sub>一</sub>専求<sub>二</sub>清白  
 之法<sub>一</sub>以<sub>二</sub>惠<sub>一</sub>利群生<sub>一</sub>恭<sub>二</sub>敬<sub>一</sub>三宝<sub>一</sub>奉<sub>二</sub>事師長<sub>一</sub>以<sub>二</sub>大莊嚴<sub>一</sub>  
 具<sub>二</sub>足衆行<sub>一</sub>令<sub>二</sub>諸衆生功德成就<sub>一</sub>

「至心はすなわちこれ至徳の尊号をその体」とする法藏菩薩の修行とは、けつして神話的な物語ではない。教主世

尊の正覚がゴータマ・ブツダひとりでの正覚にとどまるのではなく、世尊を超えた阿弥陀仏の正覚の内容として十方衆生を包むところの意義が明らかにされたのである。その仏の正覚の成就をこの世に誓う法蔵の志願と修行は、

具<sup>二</sup>足<sup>三</sup>五劫<sup>四</sup>思<sup>五</sup>惟<sup>六</sup>撰<sup>七</sup>取<sup>八</sup>莊嚴<sup>九</sup>仏国<sup>一〇</sup>清浄<sup>一一</sup>之行<sup>一二</sup> (『大経』)

と言われる。この世の衆生を仏国土に生まれさせんと誓う、如来の願行である。五劫思惟の願とは、阿弥陀の「法」の選択である。阿弥陀の法の中にすべての衆生を包み、南無、帰命せよと、一切衆生の「機」を荷負するところの菩薩の兆載永劫の修行である。先の勝行段で示されるように衆生の欲覚・瞋覚・害覚の三惡趣、穢国を場所として、衆生の罪性を包み三室に目覚めよ、帰命せよと根源から衆生を呼び覚まさんとする行、促しである。その「以<sup>二</sup>大莊嚴<sup>三</sup>具<sup>四</sup>足衆行<sup>五</sup>、令<sup>六</sup>諸衆生功徳成就<sup>七</sup>」と、衆生を浄土に生まれさせんと誓う大悲の願心、修行を自身に信知するのである。その一心帰命の信のところ如来の回向行、法蔵菩薩の修行はある。

その至心積の了解のもとに、

実諦者一道清浄無<sup>二</sup>有<sup>三</sup>一也、言<sup>二</sup>真实者<sup>三</sup>即是者即是

如来如来者真实 (中略) 真实者即是仏性仏性者真实

(『信巻』)

と、「一道は清浄」であり、「如来は即ち真实」であり、「真实は即ち仏性」なりという『涅槃経』の一文が引用されている。

また、「字訓釈」によれば、

言<sup>二</sup>至心<sup>三</sup>者至者即是・真也実也誠也心者即是・種也実也 (前同)

と言われている。「至」とは真・実・誠であり、「心」とは種・実と押えられている。その意味では「至心」とは人間の心を超えた究極的な在り方を示しているといえる。如来の呼びかけに目覚め、如来(真实)の心、「種」によって仏性が内観自証され、生きる意味の実現と方向を得るといえるだろう。

「種」とは仏の種子、「無上菩提の種子」(『浄土論註』)である。至徳の尊号を体とする法蔵菩薩の修行によって、衆生の中に埋没している仏性、菩提心が産み出されてくるということである。『撰大乘論』によれば、

從<sup>二</sup>最清浄法界等流正聞熏習種子<sup>三</sup>所<sup>四</sup>生<sup>五</sup> ⑥

と示す。「最も清浄なる法界の等流せる正聞熏習より生ずる所なり」といわれるように最清浄法界等流の正聞熏習を修道、生活の中で反復するところに仏道の門はあるという。

「聞熏習」とは有漏の場所に有漏を転ずる無漏種子、正見

としての世間を超える心、種子が聞慧、思慧、修慧の仏道の歩みの中で生ずるといわれている。しかし、先の字訓釈では、どこまでも「聞其名号信心欲喜乃至一念」の信心の体験、経験が菩提心、仏性の種子を産み出してくるといわれていると了解する。

続いて、信樂積、欲生心積も一貫して次のように示されている。

然從<sub>二</sub>無始<sub>一</sub>已來・一切群生海流<sub>二</sub>轉無明海<sub>一</sub>沈<sub>二</sub>迷諸有輪<sub>一</sub>繫<sub>二</sub>縛衆苦輪<sub>一</sub>無<sub>二</sub>清淨信樂<sub>一</sub>法爾無<sub>二</sub>真實信樂<sub>一</sub>(中略)何以故正由<sub>下</sub>如來行<sub>二</sub>菩薩行<sub>一</sub>時<sub>三</sub>業所修乃至一念一利那疑蓋無<sub>二</sub>雜<sub>一</sub>斯心者即如來大悲心故必成<sub>二</sub>報土正定因<sub>一</sub>如來悲<sub>二</sub>憐苦惱群生海<sub>一</sub>以<sub>二</sub>無碍廣大淨信<sub>一</sub>回<sub>二</sub>施諸有海<sub>一</sub>是名<sub>二</sub>利他真實信心<sub>一</sub>(信卷)

「利他回向の至心をもって、信樂の体」とする信樂積の了解である。そこには『涅槃經』の文により、信樂の目覚めが仏性の「大慈大悲、大喜大捨の四無量心、一子地の菩薩の徳をもつて示されている。『涅槃經』の菩薩の徳が『大無量壽經』勝行段の教説によつて了解されている。また『華嚴經』の文が引用される。

聞<sub>二</sub>此法<sub>一</sub>歡<sub>二</sub>喜信心<sub>一</sub>無<sub>二</sub>疑<sub>一</sub>者速成<sub>二</sub>無上道<sub>一</sub>與<sub>二</sub>諸如來<sub>一</sub>等

信為<sub>二</sub>道元<sub>一</sub>功德母(前同)

仏道における信の徳が、信樂積の内容によつて顕わされている。

欲生心積においては

然微塵界有情・流<sub>二</sub>轉煩惱海<sub>一</sub>漂<sub>二</sub>没生死海<sub>一</sub>無<sub>二</sub>真實回向心<sub>一</sub>無<sub>二</sub>清淨回向心<sub>一</sub>是故如來矜<sub>二</sub>哀一切苦惱群生海<sub>一</sub>行<sub>二</sub>菩薩行<sub>一</sub>時<sub>三</sub>業所修乃至一念一利那・回向心為<sub>二</sub>首<sub>一</sub>得<sub>二</sub>成<sub>一</sub>就<sub>二</sub>大悲心<sub>一</sub>故以<sub>二</sub>利他真實欲生心<sub>一</sub>廻<sub>二</sub>施諸有海<sub>一</sub>欲生即是廻向心斯則大悲心故疑蓋無<sub>二</sub>雜<sub>一</sub>(前同)

と、「真實の信樂をもつて欲生の体」とする欲生心の了解が示されている。

かように「三心一心の問答」を尋ねてくると、至心積、信樂積には「真實、如來は仏性、信樂は大慈大悲」という内容によつて「仏性」の文は引かれているが、欲生心積には仏性の文は引かれていない。

言<sub>二</sub>欲生<sub>一</sub>者則<sub>二</sub>是<sub>一</sub>如來招<sub>二</sub>喚諸有群生<sub>一</sub>之勅命即以<sub>二</sub>真實信樂<sub>一</sub>為<sub>二</sub>欲生体<sub>一</sub>也、誠是非<sub>二</sub>大小凡聖定散自力之回向<sub>一</sub>故名<sub>二</sub>不回向<sub>一</sub>也、(前同)

と釈義して、第十八願成就文の「至心に回向したまへり」といふ後半の文と、『淨土論註』の回向門、淨入願心、『觀經疏』三心積の回向發願心の文が引用され結ばれている。

る。

欲生心積に仏性の文がないということはどういうことだろうか。その点について安田理深師は次のように述べられる。

欲生ということとは、仏性の中に仏性を開くものをいうのである。信心の中に信心を開くものがある。眞実信心には、眞実そのものを開くはたらきがあるのである。開くは、はたらきである。そのはたらきを欲生というのである。仏性を自覚させるはたらきである。だから如来招喚の勅命といわれるのである。

「至心信樂」は信心仏性の自覚、自証経験であり、その自証を開く鍵、原理こそ欲生心積といえる。

「欲生」とは如来の欲生心である。私たちにとつては生きたること、あるいは生まれたことを欲すという根源の欲求としてある。「人身受け難し」といわれるように人間に生まれたこと、生死流転の身を越えて生きたいという人の至奥の願いといえる。二河の譬喩でいえば、白道四五寸という細い線である。火の河、水の河、貪欲、瞋恚の煩惱の渦巻く世、混乱、暗黒、不安がある危険な世、さらには傲慢で、怠惰で、自己を絶対化していく煩惱の生活の中に、どこで仏陀の究竟である智慧が自証内観されるかということ

である。善導はその細い線の宗教心、欲生の自証を「貪瞋煩惱中能生清淨願往生心」と体験、表白している。そのように欲生心とは人間の根源の欲求といえるだろう。

私たちの仏道を求める欲生心は「至心発願欲生我国」(第十九願)、「至心回向欲生我国」(第二十願)の自力の欲生心に始まる。その自力の欲生心が「至心信樂欲生我国」(第十八願)、他力の信心にどう転ずるかということに仏道の課題はあるといえる。

「至心信樂欲生我国」、如来清淨願心の回向成就の目覚め、自証は、

若行若信無<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>一事非<sub>レ</sub>阿弥陀如来清淨願心之所<sub>二</sub>回向成就<sub>一</sub>非<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>因<sub>二</sub>他因有<sub>レ</sub>也<sub>一</sub> (信巻)

と言われる。さらに『尊号眞像銘文』では、

「欲生我国」というのは、他力の至心信樂のころをもつて、安樂浄土に生まれんとおもえとなり。

と了解されている。そのように、如来の衆生を救済せんとする欲生心、その如来の欲生心の覚知、「他力の至心信樂」の自証によって、私たちは願生浄土の正定聚の機を得るといふ。今はその問題点を確かめるところで結びとしたい。

註

- ① (一)開覚仏性説 (二)信心仏性説 (三)本有理仏性説 (四)無自性  
仏性説 (五)遍滿仏性説(『真宗研究』第四、「真宗仏性論の一  
考察」桐溪順忍)
- ② 『救済と自証』(曾我量深著) 四二一～四三二頁
- ③ 『往生そして浄土の家族』(寺川俊昭著)
- ④ 『世親論集』(佐々木月樵篇) 二一～二二頁
- ⑤ 前同二一〇頁
- ⑥ 『撰大乘論 和訳と注解』(長尾雅人訳) 一三三頁
- ⑦ 『法に依りて人に依らざれ』(安田理深著) 一五〇頁

(本学教授 真宗学)